

氏 名	くら た たかし 鞍 田 崇
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 112 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目	中期ハイデガー研究 ——空間へ——

論文調査委員 (主 査) 教授 小川 侃 教授 有福孝岳 教授 安井邦夫・助教授 佐藤義之

論 文 内 容 の 要 旨

本学位論文は、マルティン・ハイデガーがその主著『存在と時間』を刊行した後のおよそ20年間を、同書に代表される彼の前期思想と、第二次大戦後の『ヒューマニズム書簡』以降の後期思想との間にたち、前期から後期へと思想が深化していく時期——本論文では「中期」と称される——としてとらえ、この時期における彼の思想の展開を追うものである。

むしろ、単にハイデガー思想の一時期を歴史的に解釈することが目指されているのではない。申請者の独自の問題意識からハイデガーを問い直し、その呼応のなかで自らの問題意識を深めていく試みでもある。本論文の副題にかかげられている「空間へ」という言葉は、この点を表している。

本論文は本論をなす四つの章と付論一章からなる。

第一章は、前期思想から中期思想への移行の端的な現れである、基礎的存在論という企ての放棄について論じる。本章では、1928年講義においてなされた現存在概念の再検討を詳細に迫うことで、この放棄の一因が、存在問題における「範例的存在者」としての人間存在の位置づけの破綻にあることを明らかにした。その際に現存在の中立性が、現存在の実存的性格の克服という仕方で生起することが明らかにされた。あわせて、この破綻を精査することで、ハイデガー独自の人間理解、とりわけ人間の中立的な自己性に関する彼独自の理解を照らし出すことができた。

第二章は、基礎的存在論放棄後にハイデガー思想がたどった展開について論じる。この展開を本章は、自由と有限性に関する議論をてがかりにして検討することで、思想的主題の位相が深まりゆく過程として提示し、後期思想の鍵概念である共属性がすでにこの時期に枢要な役割を担っていたことを明らかにした。自由と有限性に関してこうした観点から論ずることは、従来のハイデガー研究ではほとんどなかったものである。また、中期ハイデガー思想の展開にとって、ドイツ観念論、特にシェリングの『自由論』との対決が決定的なものであったことが明らかにされた。

第三章では、このように思想的位相の深まりをへたハイデガーがいかなるがたちで自らの哲学を語ろうとしたのかという、方法的問題を論じる。ハイデガーの言説に対しては、しばしばその晦渋さが指摘され、場合によっては独善的と批判されさえする。本章は、根源的存在へと迫り行く後期思想の見取り図とも言える『哲学への寄与』(1936～38)の議論の解釈を通じて、上記のような批判が皮相的なものにすぎぬことを指摘した。ハイデガーの言説はそれだけで自足していて、それを読めば存在が理解できるという性格のものではない。むしろそれを理解しようとする者自身に根源的存在を語るべく促すものであると申請者は指摘する。

第四章は、第三章が明らかにしたハイデガーの思惟の言説性格に応じるべく、筆者自身が根源的存在への問いに取り組む準備として、前期から中期をへて後期へといたるハイデガー思想の変遷の意義を空間問題という視点から再把握したものである。その主著の表題からも明らかなように、ハイデガー思想においては、存在問題を問うにあたって、たえず時間との根源的な関わりが問題とされていた。これに比して空間をめぐる問題はさほど表立って論じられることはない。しかし、このことは空間と存在との関わりの方非根源性を意味するのではない。本章は、ハイデガー自身も決してこの点を無視していたわ

けではないことを明らかにする。さらに申請者はハイデガーに示唆を受けた諸家の空間論がもつばらハイデガー前期思想によることで、近代主観性の立場にとどまっていることを批判する。その欠点を克服するため、中期思想をふまえて根源的存在との関わりにおける空間問題の意義の解明が試みられる。

なお、付論は第四章でなされたハイデガー思想の再把握に基づきつつ、生活空間の哲学的意義を論じたものである。

論文審査の結果の要旨

本学位論文が扱うのは、20世紀のドイツを代表する哲学者マルティン・ハイデガーがその主著『存在と時間』（1927）を刊行した後のおよそ20年間のハイデガーの「中期」思想である。ハイデガーの哲学の発展段階の区分については異論もありうるが、この区分は一応妥当と思われる。ハイデガー全集の刊行にともない、現代のハイデガー研究は、ハイデガー独自の思想的基盤が培われた『存在と時間』成立前後の初期を論ずるものが大勢を占めている。しかし、彼の思想がたえず生成発展を繰り返したことを考慮すると、むしろ、後期に向かう「途上において」思想が独自の深化を遂げる（申請者の意味での）「中期」においてこそ、ハイデガーの思想的独自性は顕在化する。中期ハイデガー思想の理解は、ハイデガー思想の独自性を問うにあたっては不可欠である。とりわけ彼の諸講義・草稿のほぼすべてが刊行されるに至った現時点においては、それら諸講義・草稿の検討をふまえた研究は、ハイデガー研究の最前線の課題といえよう。

本論文の際だった特徴として高く評価できるのは次の点である。(1)ハイデガー中期思想に関する公刊著作に基づくいくつかの先行研究を踏まえつつ、全集において刊行されたテキストを広く深く読みこなし新たな検討を加えていること。(2)初期から後期への移行を追いながら、その過程でハイデガーが固有の思想的立場へと至る様子をダイナミックに、説得的に描き出すことに成功していること。例えば第一章では『存在と時間』公刊直後の1928年の講義にもつばらよりながら、次のことが指摘された。すなわち『存在と時間』では「そのつど私のものである」という「性差」をもつ実存という仕方で把握されていたのが放棄され、むしろ現存在が中立性において把握されたこと。この指摘は『存在と時間』の基礎的存在論の思想が破綻したことを説得力をもって根拠づけた。(3)第二章で自由と有限性という二概念を中心に分析し、後年に自由概念が背景に退く事態を合わせ考えることで、ハイデガーの自由概念が、近世主観主義を先鋭化してその枠組みを克服しようとしたができなかったことを示した。しかし他方でこの分析のなかで、「一なるものにおける相異なるものの共属性」、「存在と人間との共属性」の概念が、主観主義克服の枠組みとして大きな役割を果たしていたことを明示した。このような分析によってハイデガーの思想が後期思想の根源的諸概念へと深化していく筋道が不十分ながら暗示的に明らかにされた。(4)たとえば時間比して二次的なものとして閑却されがちな空間論を、ハイデガーの種々のテキストが構成し直して、彼自身空間を軽視していたわけではないことを明らかにした。その上で、ハイデガーに基づきつつハイデガーを越えた空間分析が「住まうこと」として展開されている。資料の未公刊という制約もあり、中期思想においてこのような分析がなされることはこれまでほとんどなかった。申請者は最近の資料に基づいて的確に、中期思想の跡づけに成功している。

申請者の論議から窺えるのは、申請者がハイデガーの思想の展開を追うに当たって、単にハイデガーの諸概念や彼の言明を表面的にたどっているのではなく、それを事象に引き戻し、事象のレベルでそれらの概念を検討し直す作業を綿密に、かつ透徹した分析力をもって行なおうと努めていることである。

このように申請者はあくまで文献解釈にとどまらず、ハイデガーが目指したものを自ら求めようと努力し、膨大なハイデガーのテキスト、ハイデガーについての二次文献を渉猟し、ハイデガーの思索の要点を明晰に明らかにしている。そのことは例えば第三章以下でとくに顕著である。後期思想の端緒が窺える『哲学への寄与』（1936～38）をめぐる第三章では、特に「存在論的差異性」として術語化された存在と存在者との区別に関わるハイデガーの決定的なテーゼを取り上げている。申請者のテキストの解釈に基づく指摘によれば、今述べたテーゼをハイデガーが自己批判し、存在と存在者の区別がいわば実体化されて差異性が固定化されると存在者とは独立に存在がアイデアもしくは実体とみなされるという誤解を引き起こした。

以上のように、ハイデガーの透徹した理解に基づき、ハイデガーの共同思索への促しに応答しつつ存在問題に新たな光を投げかける本学位論文は、ハイデガー研究のひとつの可能性を示している。また、本論文は、人間・環境学研究科の基本理念および、人間存在基礎論講座の研究方針にも合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。